

東方天帝悲恋

Aliceチャンネル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは…自称”神”と名乗っている者の恋人が失つたことから始まつた…

愛する恋人を失つた神は、心を閉ざされてしまつた…

しかしある日、神は地上の世界を様子を見ていると、思いがけない人物を目の当たりした

それは…昔無くなつた恋人と瓜二つの女がいたからだ

そしてその女を見た神は…今すぐにでも自分のものにしたいという欲望感が涌き出た…

その神の欲望感が…”事件”化と為す…

※この物語は、YouTubeを活動しているSatomura Shion様の東方projectでの紙芝居シリーズの二次創作…正しくは三次創作となります

- ・この小説限定のオリジナルキャラあり
- ・所々意味不明な点あり
- ・残酷な描写あり

以上の3つります

苦手な方はブラウザバツグ推薦です

目 次

序章「神の計画、実行前」
第1話 幻想郷に来た手品師 part1
第1話 幻想郷に来た手品師 part2
第1話 幻想郷に来た手品師 part3

10 7 4 1

序章「神の計画、実行前」

とある何もない空間：

真つ暗で何も見えない、聞こえないこの空間の中に一人の男が：目を閉じながら誰かを待っていた

男は白髪の長髪で、背中に金色の十字架を刺繍していた、白いフード付きの長いコートを身に纏っていた

そんな男が誰かを待っていた：

するとどこから来たのかもう一人の男がフード付きの男の元に来て、膝をついた

ちなみにそのもう一人の男は少し長めの銀髪：黒いラインでのクロスをデザインとした白い服装を身に纏っている者だ

「…アクトラス」

男はフード付きの男、アクトラスと呼んだ

「おおっ、シイーガーか…」

そしてアクトラスもシイーガーと呼ばれる男に気づいたか、目を開き、シイーガーを向いた

「で、シイーガー：状況はどうだ？」

「ああ…お前が言つてたあの女の居場所ははつきりわかつた」

「そうか…それでどこなんだい？」

「女の居場所は…どうやら”幻想郷”というところらしい」

「”幻想郷”か…

そこに彼女がいるんだね」

「だがアクトラス…幻想郷に入るのはそう簡単に行くものではないみたいだ…」

幻想郷に入るには…”博靈大結界”と言う厄介な結界をどうにかしないと…」

シイーガーがそう深刻そうな顔をしていると、アクトラスは涼しそうな顔して言つた

「ああ…あの結界か…確かに”普通”では簡単に破ることは出来ない…

あの結界に闘っては心配しないでくれ…僕がなんとかするよ

…それで、他の皆は準備は万全かい？」

「ああ、もちろん…」

だが、またあの妹の奴がどこかに行つてしまいまして…」

呆れた様子のシィーガーに対し、アクトラスはどこか可笑しそうに笑つた

「また好奇心旺盛つて奴？」

やれやれ…甘いものといったずら好きな妹が困った子だね…」

「今はそいつの連れの奴が連れ戻しに来ると言つたから問題はないかと…」

「そうかい？」

なら、彼に任せよう…

シィーガー、君も幻想郷にいる”奴”と鬪う日を待ち望んでいるだろう？

情報収集も充分集めてくれたし、今はゆつくりと休んでいたら？」

アクトラスの”奴”と言う言葉にシィーガーは頷いた

「ああ…俺は”奴”と鬪い、そして消す…それが俺の目的…」

悪いが…俺には俺なりの行動をするからな」

「君が言つていた”奴”に…どんな因縁なのかわからぬけど、構わない…」

僕は彼女を手にいれればそれで十分さ…

そんな僕の計画を邪魔する奴は一人残らず消してやるんだから…

もしかすると君のお目当てである奴も邪魔に来るだろう…」

「……そいつが来たら、直ぐ様この俺が消すのみ」

シィーガーの目はそうギラギラとなりながら呟き、アクトラスの前から去つた

「もうすぐ…もうすぐ会える…

君と言う名の安らぐ場所へ…

これで僕の心を傷を癒えてくれる…
早く僕の元に来るんだ…

……”アリス”

第1話 幻想郷に来た手品師 ↴ part1 ↴

幻想郷…それは妖怪や妖精…僅かな人間たちが暮らしている世界

⋮

そんな幻想郷で、少し離れた魔法の森にある一軒家…
そしてその一軒家に住んでいるとある魔法使いがいた

彼女の名はアリス・マーガトロイド
人形使いの魔法使いである

元々彼女はこの魔法使いの森にあるたつた一軒家の独り暮しを
していた…”元々”は…

とある日の朝…

アリスは台所で朝食を作っていた

「う～～～ん…こんなものかしら？」

料理の出来栄えを見て、満足したアリスはテーブルに並べた
テーブルに並べた料理……が、一人にしては多すぎる量だが…
「ふふっ…そろそろお寝坊さんを起こさないとね」

そう、彼女には……”彼”がいたのだ

するとアリスは寝室の部屋へ向かつた
部屋に入ると、ベッドには男性がぐっすりと眠っていた
そう、この男がそのアリスの”彼”だ

「ほら、神威…起きなさい

いくら休みだからってずっと寝ていると体が鈍っちゃうわよ?」

アリスは男を神威と呼び、体を揺すりながら起こそうとしていた
「んん…?」

ああ…もうこんな時間か…」

するとアリスの声に反応したのか、神威は目が覚め、体をゆっくりと起こした

「おはよう神威…ぐっすり眠れたかしら？」

アリスは微笑んだ表情で神威に言つた

「ああ、おはようアリス」

神威もアリスに向けてそう言つた

「朝食が出来たのよ…一緒に食べましょう」

「昨日は随分と大忙しだったみたいだね…」

「まあな…

寺子屋での特別講師に永遠邸での薬の材料集め…パチュリーの図書館の整理に、最後は魔理沙の魔法店での後片付け…

目が回る程忙しかつたな…」

「全く…万屋だからって、魔理沙のは無いでしよう？」

パチュリーのはあれだけ広い図書館で整理するのは仕方ないけど

⋮

「後片付けぐらい自分で出来ないのかしら？」

「ははっ…だが、あいつにもちゃんと報酬をやるつて言つたからな…：報酬がある限り、俺はやらない主義なんですね…」

「もう…神威つたら…」

アリスと神威はそう会話しながら朝食を取つていた

いい忘れていたが…神威こと、天城神威は…この幻想郷での唯一の万屋だ

報酬が有る限り、どんな依頼でも引き受けるらしい…

そして神威にはもう1つの顔がある…：

一見、どこにでもいる人間の男に見えるが…：

転生前はなんと!!

日本神話に出てくる神…須佐之男命（スサノオノミコト）なのだ…

!!

（※何故神威が須佐之男命（スサノオノミコト）なのかは、詳しくはS

a t o m u r a S h i o n 様の紙芝居シリーズ、S2で)
神威は万屋として働きながらも…アリスの彼氏として…夫として、
この幻想郷で暮らしているのだ

「ねえ、神威…今日は暇かしら？」

「んん? どうしたんだ? …急に」

「だつて…今日は神威休みだし…せつかくだから夕飯は神威の食べた
いものを作つてあげようかなあつて…」

アリスは少し恥ずかしそうにそう神威に聞いた

「俺はアリスが作つてくれるのであれば何でもいいが…」

神威がそう答えると、アリスは少し不服そうに頬を膨らせながらこ
う言つた

「もう! それが困るんだから!!」

「アハハハハ…そう怒るなつて」

怒つているアリスに、神威は優しく慰める

「だつたら一緒に買い物して、決まればいいじゃないか?」

「うふふ…そうね

久しぶりにあなたとデートみたいになれるなんて嬉しいわ」

神威の案に、アリスは賛成したのか機嫌が治り、笑顔でそう言つた

「それじやあお昼ぐらいに人里の所でお買い物に行きましょう!」

「ああ」

第1話 幻想郷に来た手品師 ↴ part2 ↴

そしてお昼ぐらいに…二人は人里で買い物に出掛けた
人里はその名の通り、多くの人間たちが暮らしている里だ
もちろんその人里の中には妖怪や妖精たちも遊んだり、買い物したり、時には学校で学んだりしている

今日も人里は平和である

「うふふ…」こうしていられるのって久しぶりだね

「ああ…最近は万屋の仕事が忙しくて、アリスとろくに過ごす時間なんてなかつたからな…」

「そういえば…剎那のことは大丈夫なの？」

「ああ…俺からちゃんと事情説明をしたし、剎那も色々と大変だつただろうし、休ませる機会を与えたからな

…あ、アリスと一緒にいる時間が欲しいって言うのは内緒にしていいがな」

「そうね…そんなの聞いたら、絶対私に敵視してくるわ

ま、元からそうだけどね」

二人から言つてた”剎那”とは…

剎那と言うのは”天城 剎那”

神威と同じ万屋で働いており、さらには神威のメイドである

自称”美少女メイド”と呼ばれているが…

実は彼女も神威と同様、”神”の転生…櫛名田比売（クシナダヒメノミコト）もある

（※詳しくはSatomura Shion様のMMDドラマ 紙芝居シリーズ、S3で）

しかし彼女はかなり神威への愛が強く、アリスとは犬猿の仲らしく…下手にしたら手が負えなくなつたりして…

神威はそのようなことを起きないように、あらかじめそう説明し、争い事を避けてているのだ

「ま、俺が言うことが聞くのであれば…何でも聞いてくれるからなんとかなるが…」

会わなければな…」

二人がそう会話しながら歩いていると…
何やら人の集まりを見かけた

「ん?なんだ?あの集まりは…」

「そうね…一体何をやつてるのかしら?」

「ちつと見てくか?」

どうやら二人も謎の集まりに気になる様子…
その集まりの中を見ることに…

「さあさあ!!よくぞ覧なさい!!

こちらに手にしているのはタネも仕掛けもないただのハンカチ…
さてこのハンカチをですね…あることをすると素敵な出来事を起
きます」

集まりの正体は…この幻想郷には滅多に見れない手品だった
そしてそんな手品を行っているのは、これまた見かけない女性…
アリスと同じ年齢ぐらい…紙の色は茶色と黒を混ざったような色
で、少し長めだ

瞳は宝石のサファイアのような綺麗な青だった…

そんな彼女が何故この幻想郷に?そして何故手品をやつてているの
か?

「それでは…せつかくですので、誰かお手伝いを…

では、そちらにいる綺麗な黄緑髪をした妖精さん

女性は手品を見ていた妖精（大妖精）を指名し、手品の手伝いを要
求された

「では…このハンカチはしっかりと握つてくださいね
私がOK出るまでにね」

「は…はい!!」

大妖精は女性の言う通りにハンカチを丸め、しっかりと握りしめて
いた

「では今から魔法をかけますよ?いいですか?」

3 (スリ-) … 2 (ツ-) … 1 (ワン) … ! 「

そう唱えた後に、指を鳴らした女性

「OK! そろそろ開いてもいいわよ」

女性がそう言うと、大妖精は恐る恐る手を開いてみたそのとき…：

「！」

なんと!!さつきまでのハンカチが小さな花のブーケが現れた
「わああ!!すごーい!!」

「どうして? どうして? 」

周りにいた人たち、妖怪や妖精たちも思わず驚きと歓喜の声が上げ
た

「そのお花はあなたにあげます

手品を手伝つてくれたお礼です」

「あ…ありがとうございます!!」

「大ちゃんいいな～!!」

「羨ましいのだ～!!」

第1話 幻想郷に来た手品師 ↴ part3 ↴

大妖精の手元にある花束に、周りにいた妖精たちや人間たちは歓声を上げた

「ねえねえお姉さん!!アタイも何かちよーだい!」

「私もなのだー!!」

すると妖精たちや人間の子供たちが、女性におねだりをしようとしていた

その様子を見た女性はクスクスと笑った
「そうですね…こんなにたくさんの方たちが私の手品を見ててくれたで

すものね:

では、私から最後に皆さんにプレゼントを!!」

女性は懐から白い紙を取りだし、筒状に丸めた

そしてその筒に向かつて指を鳴らしたら…：

ボトボトボトボト!!

なんと、筒から大量の飴が出てきた

先程タネも仕掛けもないただの紙から飴が出てきたことに、観客は喜んでいた

「これは私からのお礼…私の手品を見てくれたお礼よ!

今日は本当にありがとう!」

「へえ…魔法や能力が使えない人間たちにこういつた催しをやつてるんだな」

「でも素敵ね…そういう人たちに楽しませてくれるのって」

「一人も彼女の手品を見て、そう評価した

「おつ、神威とアリスじやないか!」

そのとき、何やら魔女が被つてそながり帽子を被つた金髪の女が二人を呼び、近づいてく…

「あら、魔理沙じやない」

「オタクもあの手品を見ていたのか?」

「へへ～ん！まあな

それにタダで飴を貰うなんてラツキーだからな」

二人は女を”魔理沙”と呼んだ

とんがり帽子の金髪の女は”霧雨 魔理沙”

魔法を使える程度の能力の人間でありながら、霧雨魔法店を経営している魔法使い

異変が起きたときは共に戦つた仲間の一人でもある

「なあ、魔理沙…あの女もこの幻想郷の人か？」

「いや、私も初めて見る顔だぜ

「そうか…霊夢でも知らないとなると…

この幻想郷に来たのは最近となるか…」

「まあきっと紫によつてここまで連れてこられたとか」

「…確かにその可能性もあり得る」

魔理沙が言つていた紫とは”八雲 紫”

スキマを操る程度の能力であり、この幻想郷の中での最強と呼ばれる神隠し：

彼女はときどき外の世界へ行き来する時もあるため、あの手品の女も紫によつて来たのではないかとそう予想していた

ちなみに神威も幻想郷に連れてこられたのも、紫の仕業だ

「あ、そうだわ…」

魔理沙！あなたまた神威をどうでもいい後片付けをやらせて!!
神威は何でも屋じやないのよ!!」

「おいおいアリス…そう怒るなつて…

本当は私の力でやるつてわかってるけどさ…あまりにもとんでもない量だつたからさ…」

「それはこまめに片付けないからでしょう?」

自業自得よ！」

アリスは：今朝が言っていた神威が魔理沙の店の後片付けの件を
魔理沙に叱つた

「だ…だが、ちゃんと神威に報酬をやつたんだからさ…」

「そういうこつたよアリス：その辺にしなよ

それに…報酬がある限り、断らない主義なんでね」

神威がそう魔理沙に庇うと、アリスは呆れたように溜め息をついた

「もう…神威つたら」

「それじやあ私は靈夢のところに行くぜ！」

アイツにもこの飴をあげないと可愛そ.udだからな」

魔理沙は先程手品で貰った飴を靈夢という人物に渡すようだ

「ああ…靈夢にまたよろしくと伝えてくれ」

「おう！それじやあまたな!!」

と魔理沙は箒に乗つて、飛び去つた

「全く…魔理沙は相変わらずね」

「別にいいじゃないか

そういうところが魔理沙らしいからさ」

「もう…」

なんて会話していると、アリスは神威の腕を抱き締めた

「…私たちもそろそろ行きましょう」

「おつと、そういうや買い物するんだつたな」

「もう…」

こうして二人は再び人里での買い物することに…